特定非営利活動法人　太平洋戦史館

# 戦史館だより

２０２０年６月20日発行
戦史館事務局〒029-4427
岩手県奥州市衣川陣場下
４１番地㍿オフィス花岡
編集発行人　花岡千賀子

会長理事　岩渕　宣輝　　専務理事　小原　守夫　　☎0197-52-3000 FAX 0197-52-4575

今年は戦後75周年の節目、スピオリ方面から遺骨帰還できるはずだったのですがコロナ色に。それ以外は忘れられてしまうかあるいはコロナの影響で実現できなかったことに。逆にコロナが起爆剤となって、人間の弱さ、差別や偏見が爆発してしまったようなこの頃です。新型ウィルス禍の下、戦史館会員の皆様いかがお過ごしでしょうか。日々のニュースで感染者数を今も毎日チェックしていると（会報作成時点で）岩手県では感染者ゼロの状態が続いています。“岩手県の感染者第１号”にはなりたくないという、変なプレッシャーもあって、移動制限が解除された今も自粛の日々は続いています。

外出できない間に戦史館では資料整理、常設展示室の点検の時間がとれました。今回紹介する常設展示資料は朝鮮半島や中国から日本を見るとどのように見えるか、通称『逆さ地図』です。次の頁はパプア州からの遺骨帰還が遠のいている問題。３頁目はコロナ禍にあっても、戦後75周年企画の写真集出版にこぎ着けた安島さんの活動を紹介しています。

## 展示資料紹介 No.３『環日本海・アジア諸国図』

前号の『第三揚陸隊生死不明者／戦死者名簿』に続き、今回紹介するのは富山県が製作した大型（B1大）の地図。富山県土木部から正式な許可を得て、縮小写真を掲載します。戦史館では来館者に、壁面に貼ったこの地図で、戦時中に日本の植民地にされた朝鮮半島台湾、中国の人々の気持ちを想像してもらうための教材にしています。

私たちが見慣れている地図は北が上、南が手前になっていて、周囲の国々との位置関係も日本が中心に来るように配置されています。

この通称『逆さ地図』を時計まわりに回転させてください。90度以上回すと、漸く見慣れた日本列島の姿を確認できるでしょう。

地図をもとに戻して、朝鮮半島や中国の位置からもう一度日本を見るとどうでしょう。日本海は、まるで巨大な湖のようで日本への玄関口は能登半島のあたりに。

富山県が、日本海側の都市と近隣諸国の交流を深めようと地図を製作した意図がよく理解できます。

コロナ感染防止で交流が停滞してしまい、近隣諸国との様々な問題はどんどん山積みされたままですが、日本は大陸から遠く離れた島国ではなく『環日本海・アジア諸国図』の名のとおり、日本海を囲んでつながっていることを実感していただければと思います。

実物の大型地図は富山県の関連施設（美術館等）で購入可能。地図 300円。送料別。

# スピオリ方面 遺骨帰還 遠のく…

会員の方々から「岩手県はコロナ感染者ゼロ、すごいですね」に続き「コロナの影響で遺骨帰還が進まないのでしょうか？」と問い合わせをいただきます。そのたびに「いいえ帰還が進まないのは、コロナ以前の問題なんです」と、つい力んで答えています。

２月３月は毎週のように遺骨収集推進協会や厚労省へ、パプア州への調査派遣の準備に上京していたのに、全面的に渡航禁止になってしまいました。

昨年６月に日本兵遺骨帰還に関する国際約束が締結されたことで、戦後75周年今年こそスピオリ方面から 120柱の遺骨が帰還できるはずでした。漸く１月末になって、厚労省とジャカルタの日本大使館が、遺骨帰還事業の第一段階となる「周知活動」に出発することになり、その担当者に準備状況を尋ねると、本人は全く現地事情を理解していない！

急きょ推進協会の山岸さんと岩渕が、どこで誰に会うべきか、発生しそうなトラブルとその予防策の想定問答、交渉術で決してしてはいけないことは何か、などを伝授して送り出したところまでを、前号の戦史館だよりでお伝えしました。

周知活動派遣の結果は最悪だったようです。せっかく理論武装して交渉できるように段取りしたのですが、活かされることはありませんでした。Ｙ氏の報告書は意味不明。最も重要なジャヤプラを訪問せずに、市長の不正で混乱が続くビアクは不穏なので避けるべきなのに、逆に吸いよせられてトラブルに巻き込まれるという状態…危機管理ゼロです！
詳細を確かめるために厚労省の責任者宛に25項目の質問状を送り、３月12日に厚労省、推進協会、戦史館による会議を設定しました。

厚労省は「日本大使館に全てお任せしているので何もわからない。現地の周知活動の会場はインドネシア教育文化省が仕切っているので住民からいろいろ上がる声は聞くだけで何も反論できない」。大使館は遺骨帰還で失敗続きでパプアに関わりたくない気持ちが先行し「インドネシア教育文化省の指示で動いているので」と追従するだけ。教育文化省は新しく就任した大臣にビクつきながらも日本の好き勝手にさせないという思いは強烈で、「高齢者の派遣はやめて技術者だけにしてほしい」と要求してくる。国際約束なのでインドネシアの理不尽な要求は押し戻せる…と聞いていたのだが、条約の「運用に関する標準手続き」は昔のまま。パプア州にとっては、これまで戦後賠償が全く無かったのだから、条約に記された「パプアの経済的社会的利益」の実現を求めるのは当然のことでしょう。

一方、会場内の住民が「イワブチは嘘つきだ。車を贈ると約束したのに果していない」となってしまう場面もそのまま聞いて終わったようです。ビアクのユスフ氏は、遺骨帰還派遣団の歴代の団長に「日本車が欲しい」とおねだりし続けていますが、根底にはパライ海岸の碑がある土地の所有者には日本政府から年間80万円が支給されているのに、ユスフ氏の土地に建てられた『戦没日本人の碑　日本國政府』には一銭の管理費も支給されないという事情があるようです。それぞれが複雑な事情や利害、手続きの難しさばかりを強調して終わった周知活動という名の“お役所仕事”の数々。税金の無駄遣いをして結果を出そうともしない日本の外交交渉のデタラメさは、今も“健在”のようです。戦史館が訴えてきた戦後処理は、戦死者の人権…白骨遺骸となって今もパプアにとどめ置かれる戦死者たちの無念をこそ、原点に帰って思い起こしてほしいと最後に会議の場で要請しました。

# 安島太佳由写真集 『太平洋戦争 激戦地 慰霊景』 完成

戦史館会員で、戦跡カメラマンとして日本の戦争を追い続けている安島さんが戦後75年の今年、写真集『太平洋戦争激戦地慰霊景～沖縄・サイパン・ペリリュー・フィリピンを辿る』を刊行しました。コロナ禍の影響でほとんどの機会を奪われてしまった中で「戦死者への慰霊の気持ちだけは忘れない」と出版にこぎ着け、写真展も計画しています。

表紙の写真は上下２枚の写真で構成されています。上の写真はサイパンのジャングル、下はフィリピンのカリラヤ日本人戦没者慰霊園にある鳥居。フィリピン国民の感情を考慮して、首都マニラから離れたラウナ州カリラヤに慰霊園が建設されました。ページを繰ると激戦地の今の姿から、戦死者の無念に思いが伝わってくるようです。写真集のあとがき「写真に込めた思い」より以下に抜粋します。

「日本の戦争」をテーマとして活動してきた２５年
国内外の戦跡を訪ね歩いた体験は私の財産になっている
撮りためた戦跡写真は貴重な記録として
後世に残すべき宝物だと自負している
私が撮った写真の一枚一枚には、
何かしらの「戦争の証」が写し込められている
写真には止まった時間だけがある
何かを感じ、何かを思い、何かを考えれば
その一枚の写真は永遠となって
人々の脳裏に焼き付いていくことになる

今回の取材で戦場跡に立ち、
慰霊の思いを持ちながら光景を撮影すると、
写真はカメラで撮るものではなく、
やはり心で撮るものだとつくづく思った
その写真こそが多くの人の心を打つものと確信する
写真の力は「心の力」
そのエネルギーの源は、戦死者の「無念の思い」、
「生きたかったという思い」に他ならない
彼らの思いが皆さまに少しでも伝わることを願いたい

☆写真集と写真展に関連するお問い合わせは、安島写真事務所へ連絡お願いします。
TEL090-1030-6827　Eメール photo@yasujima-takayoshi.com　www.yasujima-takayoshi.com/

①写真集の申込先⇨郵便局備付の青色の払込取扱票が便利です。加入者名「安島太佳由」口座番号「00160-6-386400」　価格．１冊1700円（消費税込み1500＋送料 200円）

②特別企画：既刊の写真集「インドネシア戦跡巡礼」「昭南島・シンガポール」と、今回刊行された写真集を合わせ３冊セット(送料込) 5000円で頒布中。(8月末までの期間限定)

③お願い：安島さんの写真集は自費出版のため書店ではお求めになれません。個人で出版や写真展を開催し、若い世代への講演活動を続けるには多額の費用がかかります。戦史館会員の皆さんに、安島さんの活動を支援する寄付もあわせてお願いしています。

④出版記念写真展のご案内。会場 アイデムフォトギャラリー「シリウス」期間7/30日(木)から 8/ 5日(水) 時間 am10:00～pm6:00（最終日５日は午後３時終了　日曜休館　入場無料　交通：東京メトロ丸の内線「新宿御苑前駅」下車。注意⇨夏場に緊急事態宣言や自粛要請等が出された場合写真展延期や中止の可能性もあります。直前に開催状況確認をお願いします。